



く余裕はない。学会か、日本原子力産業会議の委員会等でPRも兼ねて出版すれば広い範囲の専門家（技術者）が分担するので良い本となるのではないかと心ひそかに望んでいた。

産業界（電力会社）がその必要性を最も強く感じていたので、電力会社の技術者約20名が分担して250頁の本にまとめて出版されたのがこれから紹介する技術読本であって、原子力工学という本ではなく技術を主にした内容の正に私の望む本であった。

原子力工学は理学、工学の全般にわたる広範な学問的基礎の上になりたつ総合的な工学である。技術者がそれぞれの専門の立場から原子力工学の分野に寄与するためには、専門の工学に対し十分な基礎知識をもっていることほかに、原子力全般のことを理解していることが必要である。従って電気工学科の学生としては原子力工学の高度の理論を習得するよりも、その数学や、大形科学用電子計算機を使用する研究や、設計の結果を理解して技術面に応用することに重点を置くべきであると考えられる。

この本の執筆者は何れも原子力発電の実際の専門技術者ばかりで、担当部門の第一人者である。

このことは同一内容の説明でも技術者の立場から、現場の経験から、これから原子力と取り組む後輩に対して理解し易いように書かれているので、技術者を目指す高専生にとっては最適の本と考えられる。

従ってこの本を読むに当って、その内容を知識として取り入れるだけでなく、新しい工業、高度の工学技術、新しい開発技術に取り組む技術者の心構えのごときものを体得するよう心掛けるべきである。

内容は14章に分かれ原子力発電に関して全項目が要領よくまとめてある。

原子炉の理論は、核物理学から炉の構成、原子炉理論、原子炉動特性、設計の要点まで書いてある。

核燃料については資源、燃料サイクル、加工、その他原子炉に特有の材料に関しては、今までの材料工学では取り扱ったことのない中性子の挙動について述べてある。

また安全関係、放射線防護等公害対策の実状、現在建設中または計画中の各種原子炉について、各々制御運転等実際面の特長が比較検討されている。

なお近い将来の原子炉として、高速増殖炉にまで言及している。

電力会社の技術者向としては発電所の計画、建設、運転、保守の実際面まで触れている。

放射線関係は防護のみで利用については原子力発電ということで割愛されている。

使用済み燃料の再処理、放射性廃棄物の問題は発電所の建設が進むにつれ最も重要な課題で、国策の一つとして早く方針を決定すべき問題であるが、この点は主として化学の問題であるので電気技術者向の読本として編集されたのであまり触れていない。

放射線利用については本校では電気応用の科目の中で触れている。

わが国は資源に恵まれずエネルギー源として、石油の輸入、原子力発電としてウランの輸入に存在せねばならぬ運命にあるが、核融合炉が開発され、海に囲まれたわが国では、海水から重水をとり燃料として使用する時代は今後少なくとも20年以後となると思われるので、私の時代には到底エネルギー自立はできないが学生諸君の時代に核融合炉が実用化される可能性があるので、この夢の実現に役買う青年は本校にはないだろうか。

## 友と語る —文学のひろば—

時空を超えて存在するような優れた文学作品に対しては、抱く感慨も各人各様のものがあって興味深い。作者の意図するところはひとつであっても、読み手の読解力や視点を異にすることによって様々な見解が生まれるのである。ここに掲げる読書感想文は、夏休みの国語科の課題の中から、

まとまりがあつてかつそうした見解の差異で今後論争に発展しそうなものを選んでみた。次号以下、論争の形式を続けていきたいので読者諸氏の投稿を期待している。なお原稿は国語科生田のもとまでお届け願いたい。

### 「狭き門」を読んで

1 D 佐々木 秀明

愛というものは、信仰にも恋にもある。恋の愛というのは、いつも愛した人のそばにいて、なんでもしてや

この物語では、信仰と愛と恋が中心になっている。

りたい。その人と共に喜び、共に苦しみたいという直接的な愛で、信仰の愛は、自分の恋を退け、その人の将来のために信仰を通して自分の愛を全うするという間接的な愛である。前者の恋の愛というのは、ごく普通の愛の表現のしかたで、ジェロームの方である。後者の信仰を通しての愛というのは、アリサの自分の恋を犠牲にしてジェロームを主に近づけようとしたもの

である。しかし、ジェロームが主に近づくために、なぜアリサが障害になるのだろうか。たとえジェロームがアリサと結ばれても、彼が主に近づけないとはかぎらないと思う。アリサはジェロームを助け、主に近づかせることもできるのではないか。ジェロームもそれを望み、アリサも最初はそれを望んでいた。そしてそうなることが最も自然でふたりにとって最も幸福なことだと思ふ。

信仰とはそんなに強いものなのだろうか。自分の恋を貫くよりも主に近づく方がだいじなことなのだろうか。愛は死よりも強いという。仮にここに自分の愛している人が危険にさらされているとしよう。もし自分がほんとうにその人を愛しているならば、その人を放っておくはずがない。自分の命を投げ出してでもその人を救うだろう。それだけ愛は強いものなのだと思う。死は神聖なものだが、その神聖とは、やはり信仰からきていると思う。その死に愛が勝つというのだから愛は信仰よりも強いのではないだろうか。

直接相手におつける愛と遠くからその人を見守る愛。愛の表現のしかたは人によって違うだろう。少なくともぼくは、ジェロームのように直接表現したい。その人がそれでよければ。ジェロームも主から少しくらい離れていても、アリサと結ばれるのならかまわないに違いない。そして、主に少しでも近づこうと努力するだろう。そう、たとえそれにはほど遠くとも、それに近づこうとする努力、その努力こそ、その主に一步近づいたことになるのではないだろうか。

アリサはジェロームのために恋を犠牲にしたが、もし彼が主に近づかないまま死んでしまったら、アリサの犠牲はむだになってしまったのではないだろうか。今の時代だったら事故、災害など、そうなる危険がたくさんある。少しオーバーかもしれないが、人間皆あすも知れぬ命かも知れない。それは先を見通すこともたいせつである。しかし、先のことばかり考えて今をつかみそこねては、先などもどういつかめるはずがない。自分の気持ちを素直に持って今を精一杯生きることが、先を作るものになるのだと思う。

アリサは、人間は幸福のために作られていないという考えをもっている。アリサとジェロームは離れた所に住んでいたので文通をしていた。しかし、彼女は幸福になり過ぎるのを恐れて、唯一の楽しみであった文通もやめてしまい、彼に会うことも恐れた。しかし、人間が幸福を望まなくなったらこの世の中はどうなるだろう。苦しみだけがうずを巻いて、歌の文句ではないが右も左も真暗やみになってしまうに違いない。人間は幸福を求め、努力すべきである。幸福があるからこそ毎日を楽しむことができるのだ。

とにかくこの世がアリサのような、恋も捨て幸福をも望まない人間ばかりになったら、おもしろくない世

の中になってしまう。そんな世の中になってほしくない。

## 「狭き門」

2 M 佐藤重勝

「狭き門」。  
この物語を読んだ時、ある人は、ジェロームとアリサの愛に疑問を感じ、彼らにとって、結ばれることが最も自然で幸福なことだと考えるかもしれない。それは、おそらく正当な考えであろう。しかし、アリサの立場から考えてみると、決してそうとばかりは言えないような気がする。確かに、その場限りの幸福に酔うことを望み結ばれようとするならば、それは、彼らにとって容易なことだったにちがいない。が、それはあくまでも第三者的な傍観的な立場での感想であって、アリサが本心からそう考えたとは思えない。実際、彼女の日記を見ると、次のようなことが書かれている。

私は彼の妨げになっている。彼が、もっと深く徳の中に踏み込んで行くのを引き止めているのだ。こんなところから推察されることは、彼女は、ジェロームとの結びつきよりも、むしろ、自分を犠牲にして神の魂にもふさわしいと思われる彼の魂を、より主に近づけようとしていることである。つまり彼女はジェロームと自分との間に、直接的な地上的な愛の存在を認めていない。もし、こんな気持ちのまま彼女がジェロームと結ばれたとしたら、幸福という影像・神の中の彼を見出せたであろうか。

さて、ここで考えなければならぬのは、このような生き方をするアリサという人間についてである。彼女は、人間の欲望の醜さを知り過ぎたが為の禁欲的性質と、一面ではエゴイズムの性格を兼ね備えた極めて模範的な人間である。ところで、彼女の性格をこれほどまでに左右している根本のものは何か。それは、作品中にも数多く使用されている「徳」ということは、これこそ彼女自身を左右し、形造っているものに他ならない。この基盤にあるのが厳格な宗教の信仰である。結局はそれが悲恋につながったのである。

ぼくはここまで「徳」ということばを不用意に用い正確な理解はしていないかもしれない。しかし作品中では、少なくとも「徳」とは魂の美の形式である。そしてその美を究明するということは、未来の報酬を得ることではないと言っているように思える。

このようなことをぼくが言うのも、作者ジイドが、幸福を求めながらも、それを自分のものとしなかったアリサの徳主義からくる矛盾に懐疑的な否定をしていると考えたからである。つまりぼくには、ジイドが、自分の背徳的な生活とは裏腹に、アリサの徳主義的な生活を強く描き出し、その両方をもつれ合わせるこ

によって、アリスの極限的な美しさ・徳の美しさの結末からくる瞬間的な無常観を、感動とは別に、ぼくたち読者に考えさせているように思えたのである。

## 「人形の家」について

1 E 西 牧 均

この物語は、  
弁護士メルヘル一家がより  
幸福になろう

とする矢先に、妻ノラが1人の人間として生きるために幸福な一家を捨てるといふ筋である。彼女が出ていた時のメルヘルの惨めな姿が私の目に浮かぶ。私には彼の気持ちがわかるような気がする。今まで愛していたはずの妻には去られ、あとには子供が3人も控えている。私はノラのことよりもメルヘルの立場に同情したのだ。ああいとも簡単に子と夫を捨てられるものかと。

どうしてノラはそれほどまでの決心をして出て行ったのか。私には、ノラがうって変わって見えたのだ。時には娘気分まるだしだったノラ。夫に甘え子供を優しく見守っていたノラがあんなことをするとは。しかし長い間、父親にそして夫にと彼らに思い通りにさせられた（思い通りにさせたのかもしれないが）ノラの心中には、彼らの考えとは違ったものがつもり積もっていたのである。それがたまたま事件を契機に飛び散ったのであろう。そして彼女は気付いたのだ、メルヘルの心に。自分を可愛がって慰みにしていただけのメルヘルに。彼の愛は真実ではなかったのだ。メルヘルはこう言った。

「ノラ、わたしはときどき思うんだがね。恐ろしい危険がお前の身に迫ってきて、そのために、わたしが命も財産も何もかも投げ出して、お前を救うというようなことにでもおつかってみたいと思うんだ」と、しかし、事実その恐ろしい危険がノラの身の上に降りかかったとき、メルヘルはごうい放ったのだ。

「ノラ、お前のためならどんな心配も苦しみもたえ忍ぶ。しかし、いかに愛する者のためとはいえ、名誉を犠牲にする者はないぞ」

と。彼は〈命も財産も何もかも投げ出す〉ことはできなかった。まったく身勝手ではないか。彼女はこんなメルヘルに気付いたのだ。そして自分が人形だったことも。そんなノラだから、彼女が家を捨てたのは当然起こるべくして起こった仕方のないものかもしれない新しく人生を出発するノラに幸あれと、ひとまず私は拍手を送る。

だが、まだ私には子を捨てて夫を捨てたノラの行動をいいことだと言うわけにはいかない。ノラにいかなる理由があったにせよ、家を出ていくことは3人の子供たちを悲しませることではないか。母の愛とはこんな程度か。それとも、家庭を捨てたノラの行為のよしあ

しを考える以前に、彼らの社会と父や夫がノラに接していた態度について考えねばならないのだろうか。ノラが1人の人間として認められもあつかわれもしなかったことが、ひいては女性の権利を認められないというところにつながるであろう。はたして、人間として生きるということ、母親として生きるということとは、次元を別にして考えるべきであろうか。

## 「金閣寺」について

2 M 目 黒 乙 彦

金閣寺焼失  
について、一  
般に「永遠の  
美に対する憎

悪から放火した」といわれる問題を私なりに主人公の精神面、特に美意識の点からとらえてみたい。

「私」の中で実物の金閣と心象の金閣は一体とならずに併存し続ける。太平洋戦争のさなか「私」は金閣が不安によって建てられた建築と考える。そして戦乱の不安や多くの屍と夥しい血が金閣の美を増すように感じたのであった。私はここでまず「私」の狂人性を感じとる。「私」は実物が悲劇的な美しさによって心象の金閣を征服させたと言う。金閣に対する美意識を実物のそれが悲劇的な美しさによって「私」の中で増大し独占したのであろう。

やがてその不安が去った時、再び二つの金閣は対等となる。美意識がなぜ自ら金閣を焼くまでに至らせたか。私は先の悲劇的な美しさを求める心を根底としてしばしば「私」の人生を遮断する金閣を目前から取り除きたかったのだらうと思う。しかし人生を遮断したのは心象の金閣であり、実物を破壊したとて妨害物は取り除けぬのではないか。さらに追究してみよう。

「私」は突然に出奔する。その出奔の原因は老師との違和感が最も大きかったが、それに加えて美の観念から逃げだしたい欲求があったと思う。その最中に金閣を焼く決心をする。この決心はふと「私」の頭に浮かんだ考えで、順序だてに論理の展開はなかった。ここで「私」の心の奥に何かその決心を与える根底となるものが、「私」の中に育っていたに違いない。それは次に「私」自身がその決心について思考するところから判ってくる。

「私」はなぜ出奔の原因の老師を殺そうとせず、金閣を滅ぼそうと思ったかを思考する。それは老師を含めた人間に無力を感じ、その無力の根源が金閣にあるものと思ったのである。そしてまた金閣の厳密な一回性を悟る。「私」は全く奇妙な思考をする。「生」あるものは厳密な一回性をもたない。金閣の不壊の美しさから、却って滅びる可能性があると言うのだ。なるほどと納得できる。しかし、これはあくまで狂人的思考である。また、この厳密な一回性と先の悲劇的な美しさは一致しないではないか。厳密な一回性と悲劇性

は関連はするが、「私」にとっては関係なかったと思われる。「私」は過度に厳密な一回性にとらわれていた。あるいは悲劇性が決心の母体となったとも考えられないことはない。とにかく、先の悲劇的美しさを求める心は、放火の時点では「私」の中の本当に小さい

存在だったにちがいない。放火の想念の根底は金閣の厳密な一回性であるとする。

やがて「私」は独特の狂人的思考で、想念の正当化を積み重ね、「世界を変貌させるのは行為」という信念のもとに、私曉に金閣を炎上させる。

## 〈資料〉 読書アンケート集計 (中間発表) 回答率82.1%

A	読書することを意識あると認めますか	(629)	99.1%	
	イ 認める	562	89.3	
	ロ 認めない	25	4.0	
	ハ わからない	42	6.7	
a	上の問にロと答えた人は次のうちより選んで下さい。	(25)	4.0	
	1 読書より行動が優先するから	13	52.0	
	2 読書よりおのれの思考が大切だと思うから	8	32.0	
	3 読書以外にもラジオ・テレビの話などで必要な知識は得られるから	2	8.0	
	4 その他	2	8.0	
B	読書は好きですか 嫌いですか	(608)	95.7	
	イ 好き	343	56.4%	生まれつき 170 49.6 動機があった 172 50.1
	ロ 嫌い	59	9.7	生まれつき 50 84.7 動機があった 6 10.6
	ハ どちらでもない	206	33.9	生まれつき 131 63.6 動機があった 35 17.0
a	それは生まれつきですか それとも動機がありますか			
	イ 生まれつき	351	57.7	
	ロ 動機があった	213	35.0	
b	Bでイ aでロと答えた人は好きになった動機を思い出して下さい	(163)	26.8	
	1 先生の影響	25	15.3	
	2 両親や親戚の影響	22	13.5	
	3 友人・先輩等の影響	74	45.4	
	4 図書館で最初に読んだものに感銘をうけてから	42	25.8	
	5 その他			
c	Bでロ aでロと答えた人もその動機を思い出して下さい	(3)	0.5	
	1 先生の影響			
	2 両親や親戚の影響	1	33.3	
	3 友人・先輩等の影響	1	33.3	
	4 人から勧められたりして読んだものに絶望してから	1	33.3	
	5 その他			
C	教科書・参考書以外に賞やされる読書時間は1週間に何時間くらいとっていますか	(622)	98.0	
	イ 0~1	110	17.7	
	ロ 1~2	99	15.9	
	ハ 2~3	116	18.6	
	ニ 3~4	113	18.2	
	ホ 4~5	71	11.4	
	ヘ 5~6	37	5.9	
	ト 6~7	24	3.9	
	チ 7~	52	8.4	
D	読書時間が少ないと考えている人は 次のうちより理由を選んで下さい。とくに1つとは限りません	(529)	83.3	
	1 学校の勉強に追われる	179	33.8	
	2 クラブ活動に追われる	120	22.7	
	3 アルバイトに追われる	27	5.1	

	4 読書以外の関心事に追われる	186	35.2
	5 通学時間にとられる	17	3.2
	6 その他		
E	1か月の小遣いの中で図書費は何パーセントくらい使っていますか	(622)	98.0
	イ 0~10	206	33.1
	ロ 10~20	198	31.8
	ハ 20~30	100	16.1
	ニ 30~40	44	7.1
	ホ 40~50	31	5.0
	ヘ 50~60	21	3.4
	ト 60~70	5	1.0
	チ 70~	16	2.6
G	自分の読書傾向をかえりみるとき、次のうちの主としてどれに該当しますか	(871)	137.2
	1 人生・哲学及び宗教的なもの	119	13.7
	2 政治・経済・歴史等社会科学的なもの	48	5.5
	3 自然科学的なもの	73	8.4
	4 工学技術的なもの	54	6.2
	5 芸術的なもの	30	3.4
	6 外国文学	207	23.8
	7 日本文学	200	23.0
	8 マンガ(特にどの作家のものか)	140	16.1
H	あなたがもっとも落ちついて勉強できる場所はどこですか	(585)	92.1
	1 自宅	320	54.7
	2 寮または下宿の自宅	172	29.4
	3 図書館	44	7.5
	4 教室	49	8.4
	5 その他		
I	あなたの本校図書館利用の仕方は次のうちどれですか (但し、談話室、ゼミ室等は考慮に入れないものとする)	(597)	94.0
	1 本を借りて帰り、閲覧室も利用する	224	37.5
	2 本を借りて帰るが、閲覧室は利用しない	(172)	28.8
	なぜなら		
	イ 閲覧室には人がいて落ちつけないから	73	42.4
	ロ クラブ活動などで時間がないから	54	31.4
	ハ 読みたい本が閲覧室にないから	16	9.3
	ニ 通学距離が遠いから	16	9.3
	ホ その他	13	7.6
	3 本は借りないが、閲覧室は利用する	(201)	33.7
	閲覧室利用の目的は		
	イ 雑誌閲覧のため	121	60.2
	ロ ただ勉強の場として	80	39.8
	ハ その他		
J	読みたいと思う本は、本校図書館にありますか	(565)	89.0
	1 大体そろっている	148	26.2
	2 あまりない	287	50.8
	3 ほとんどない	130	23.0
L	あなたが図書館(談話室等は除く)を特に利用する時間はいつですか	(615)	96.9
	1 昼休み	311	50.6
	2 放課後	168	27.3
	3 授業のあいま	40	6.5
	4 自習時間	96	15.6

# 新着図書目録

※印は図書館、他は各教官の研究室に所在

## 総記

日本の名著17集 22	杉田玄白、平賀源内、司馬江漢	中央公論社※
楠山春樹	淮南子 中国古典新書	明德出版社
日野開三郎	五代史	同
	本居宣長全集 第7巻	筑摩書房
世界の名著56	マンハイム、オルテガ	中央公論社※
	朝日新聞縮刷版 46-3	朝日新聞社※
長沢雅男	参考調査法	理想社※
	国際十進分類法索引	日本ドクメンテーション協会
	福沢諭吉全集 第13巻	岩波書店
	同 第14巻	同
	同 第15巻	同
	同 第16巻	同
	同 第17巻	同
	同 第18巻	同
	世界年鑑 1971版	共同通信社開発局
	日本新聞年鑑 昭和45年版	電通
	福沢諭吉全集 第19巻	岩波書店

現代学問の+		
ための研究会	学習の設計	雄渾社
出版年鑑編集部		出版ニューズ社
	出版年鑑 1971	小学館※
	大日本百科事典17	

## 哲学

岩波講座 哲学7	哲学の概念と方法	岩波書店※
増谷文雄	仏教の思想10	角川書店
	鈴木大拙全集 第30巻	岩波書店
	アリストテレス全集1	同
	鈴木大拙全集 別巻1	同
日本思想大系6	源信	同
同10	法然、一遍	同
日本思想大系14	日蓮	同
同25	キリスト教書、排耶書	同
同34	貝原益軒 室鳩巢	同
同42	石門心学	同
同51	国学運動の思想	同
同11	親鸞	同
秋月龍理	張鈴木禅学と西田哲学	春秋社
茂泉昭男	アウグスティヌス 倫理思日本基督教思想の研究	団出版局
	ヨーロッパ、キリスト教史中央公論社 I, II	

岩波講座 哲学6	自然の哲学	岩波書店※
同8	存在と知識	同※

## 歴史

角田文衛	王朝の映像	東京堂出版
	日本と世界の歴史20	学習研究社※
岩波講座 世界歴史27	現代4	岩波書店※
田辺健一	都市と国土2	鹿島研究所出版会
	ホイジンカ	ホイジンカ選集3
アルバート		
シュペール	ナチス狂気の内幕	読売新聞社
大塚伸	ルネサンス文化の研究	清水弘文堂
山鹿誠次	都市地理学	大明堂
藤岡謙二郎	地形図に歴史を読む	同
飯塚浩二	北緯79度	古今書院
	日本の文化地理18	講談社
	日本と世界の歴史21	学習研究社
岩波講座 世界歴史13	中世7	岩波書店※
	日本庶民生活史料集成14	三一書房※

## 社会科学

柏原茂	経済学全集28	筑摩書房
Yujiro. Hayashi	Perspectives on Post industrial Society	University of Tokyo Press
	Japan Company Directory 1971	Oriental Economist
城戸浩太郎	社会意識の構造	新曜社
宮田登	ミロク信仰の研究	未来社
マックス・ウェーバー	支配の諸類型	創文社
依田新	日本人の性格	朝倉書店
東京都総務局		東京都広報室
統計部	東京事業所	
半谷清寿	将来の東北	アイ工書店
三崎教	マス・コミュニケーション論	学文社
佐藤武夫	都市問題	新日本出版社
大塩洋一郎	新訂 都市計画法の要點	住宅新報社
伊東光晴	住みよい日本	岩波書店
村松定孝	日本人	ヴェリタス出版社
布留武郎	情報社会とマス・コミュニケーション	協同出版
電気通信総合研究所	これからの社会とマス・コミュニケーション	毎日新聞社
高萩竜太郎	機器利用の教育工学	大日本図書
十久尾雪児	五大御伽話の謎	虎見書房

## 自然科学

Lawrence E. Nielsen	高分子の力学的性質	化学同人
二宮信幸	ポテンシャル論	共立出版

ブルバキ	ブルバキ数学原論 代数1	東京図書
同	同 2同	同
同	同 3同	同
同	同 4同	同
同	同 5同	同
同	同 6同	同
同	同 7同	同
同	同 位相1同	同
同	同 2同	同
同	同 3同	同
同	同 4同	同
同	同 5同	同
押田勇雄	熱力学	裳書房
黒沢誠	熱力学概論	成山堂書店
鬼頭史城	熱流体の数学	コロナ社
Lynn H. Loomis	An Introduction to Abstract Harmonic Analysis	Nostrand
N. Ja. Vilenkin	Special Functions and the Theory of Group Representations	American Mathematical Society
C. Carathéodory	Calculus of Variations and Partial Differential Equations of the First Order Part II	Holden-Day
Lars. Harmander	Linear Partial Differential Operators	Springer
A. N. Tychonov	Partial Differential Equations of Mathematical Physics Vol II	Holden-Day
Jerald D. Parker	Introduction to Fluid Mechanics and Heat Transfer	Addison-Wesley
A. マルクシエビッチ	級数	東京図書
G. ボリア	いかにして問題をとくか	丸善
同	数学における発見はいかになされるか 1 帰納と類比	同
同	同 II 発見的推論	同
橋本秀	無限級数入門	朝倉書店
林敏雄	原子核実験ニレクトロニクス	横書店
武田進	ブラズマの基礎	朝倉書店
熊谷寛夫	真空の物理と応用	裳書房
I. S. Sokolnikoff	Mathematics of Physics and Modern Engineering	McGraw Hill
中村伝	統計力学	岩波書店
富山小太郎	力学	同
中村稔正	日本の0メートル地帯	東京大学出版会
泉信一	数学公式 附函数表	共立出版
研究情報センター	公啓・水資源編 第1巻	研究情報センター
Ian N. Sneddon	特殊函数入門	丸善
前田憲一	電磁波動論	オーム社
高木貞治	近世数学史談	共立出版
A. Cohen	コーエンの微分方程式	森北出版
O. Veblen	ヴェブレンの位相幾何学	同
玉虫文一	岩波理化学辞典	岩波書店
春日屋伸昌	新編 数値表	学蔵社
鬼頭史城	熱流体の数学	コロナ社
和田八三久	高分子の固体物性	培風館



